

# 日本プロテスタント史序説

山 口 光 朔

日本にはじめてプロテスタント系の宣教師が上陸したのは、いまからちょうど百年前のことである。このために、プロテスタント系の各教派は、いろいろな記念行事を行いつつある。日本聖公会は、カンタベリー大主教フィッシャー博士を迎えて、すでにこの4月に東京において宣教百年記念式典を開催しており、日本キリスト教協議会（N・C・C）でもきたる11月に同協議会関係の各教派（日本聖公会をふくむ）合同の記念式典を行うことになっている。このときにあたり、わが国における初期のプロテスタント史ならびにその意義を再考してみることは、あながち無意味なことではあるまい。事実、幕末期に日本伝道のためにリギンスやウィリアムスのような外人宣教師がやってきたということは、ただたんに教会史の面からのみではなくて、ひろく文化史的・社会史的に大きな意義を有している。そこで、本論においては、一応1859年（安政6）における最初の宣教師の来日を中心として、幕末期におけるプロテスタント史というものを概観してみたい。

## （1）

19世紀のヨーロッパは、産業資本主義の段階にはいり、その急速なる発達・発展は、イギリスを先頭として世界市場の形成を促進した。すなわち、

19世紀の前半には、ヨーロッパはほぼ近代資本主義を確立して、イギリスは通商自由の原則を樹立し、東インド会社は保護貿易主義を廃止し、汽船や海底電信は発達し、カリフォルニアやオーストラリアでは金鉱が発見されるなどのことがあって、いよいよ世界市場の形成が具体化してくる。そして、ヨーロッパ側の世界市場の形成にたいする積極的な意欲のまえには、ひとり東洋が孤立するということは、とうてい許されるべくもなかった。まず中国がアヘン戦争（1839—42年）を契機として開国を余儀なくさせられる。この世界史的必然は、日本の孤立をも許すはずはなかった。これと並行して、欧米諸国のプロテスタント教会は、着々と東洋伝道の準備をととのえ、まず中国へ、ついで日本へも宣教師を送りこんできた。

わが国にはじめて渡来したプロテスタントの宣教師は、米国聖公会のリギンスである。かれは、いまを去るちょうど百年前、すなわち、1859年（安政6）5月2日、に長崎へ上陸した。しかし、厳密にはそれ以前にもプロテスタント系の宣教師の渡来が皆無であったわけではない。また、アメリカやイギリスの各伝道会社では、はやくから対日伝道を計画していたし、みづから対日伝道に従事することを志願した宣教師もすくなくなかった。

たとえば、イギリス海軍は、海軍部内で琉球への伝道を企図して、1843年（天保14）に琉球海軍伝道会なるものを設立して、1845年（弘化2）にハンガリー生れのイギリス人ベッテルハイムを派遣している。かれは、その翌年に家族とともに那覇に着任して、同地に数年間とどまり、伝道に従事した。1853年（嘉永6）に日本への途上で琉球に立ち寄ったかのペリー提督一行は、那覇でベッテルハイムに会っている。ちなみに、わが国において行われたプロテスタントの礼拜は、ペリーの艦隊が浦賀入港の翌々日、すなわち、7月10日の日曜日、に幕府役人の来訪を拒絶して、艦隊付牧師ジョーンズの司式で行った礼拜を最初とする。このときには、「よろずの

くにびと、わが主にむかいて、こころのかぎりに、よろこびたたえよ」)  
現行賛美歌4番) という讃美歌が歌われたとのことである。ペリー艦隊は  
また、翌年に再来した際に、神奈川の外人墓地において一乗組員の葬儀を  
とり行っている。これは、プロテスタントがわが国で営んだはじめての葬  
儀と思われる。

一方、アメリカにおける最初の伝道団であるアメリカン・ボード(1808  
年創設)は、はやくも1828年(文政11)に、『ミッション・ヘラルド』誌  
上に「日本伝道のために28ドル87セントの寄託を受けた」旨を公告してい  
る。もちろん、アメリカン・ボードが日本伝道にのり出すのはずっとのち  
のことであるが、この最初の献金はマサチューセッツ州ブルックリンの家  
庭祈禱会から捧げられたもので、そのころからすでに日本伝道のための祈  
りが一部の人びとのあいだでなされていたことは、注目に値する。

また、日本伝道を志して渡航しながら日本に上陸できなかった宣教師と  
しては、ドイツ人のギュッラフがあげられる。かれは、1837年(天保8)  
に日本人漂流民の送還に便乗してモリソン号で来日せんとしたが、「無二  
念打払はせ」と命じた幕府の異国船打払令によって同船が撃退されたため  
に、船上より日本国土を目前に望みながらもむなしくマカオへと引きかえ  
し、同地で漂流日本人を助手として聖書を邦訳して、同年シンガポールで  
『約翰福音之伝』と『約翰上中下書』の二書を刊行している。一説には、  
1613年(慶長18)に京都でキリシタンたちによって新約聖書の邦訳が刊行  
されたとのことであるが、それが誤伝であるとすれば、本格的な新約聖書  
の邦訳はギュッラフのものが最初である。またこの二書は、1855年(安  
政5)に香港で刊行されたベッテルハイムの部分訳とともに、聖書本位に  
もとづくプロテスタントの宣教師による聖書邦訳事業のはじまりとしての  
意義をもっている。

その当時日本沿岸に漂着した外国船の乗組員のなかにも、プロテスタント信者がすくなくいたことは否定できない。

『ハリス日記』（初代駐日アメリカ総領事ハリスの日記）には、1849年（嘉永2）に長崎で踏絵を経験したアメリカ捕鯨船の乗組員ジョン・マーチンのつぎのような話が引用されている。

「われわれは長崎で奉行所につれてゆかれたが、その入口をはいると、床の上に救世主の像のある金属板がおかれてあるのを見つけた。わたしは、わたしのすぐ前で、1人のイギリス人がその上に片足だけをのせると、役人たちがかれを引きもどして、両足を一緒にのせさせるのを目撃した」

このように、外人漂流民は、一様にキリシタン改めの踏絵というものを経験させられたようである。だが、この踏絵も、プロテスタントには、あまり効果がなかったようである。なぜなら、1848年（嘉永元）に北海道へ漂着して長崎に送られたカナダ出身の捕鯨船乗組員ラナルド・マクドナルドは、聖公会員であったので、すこしもちゅうちょすることなく真鍮製の画像をふみつけた。かれは、役人から信仰のことをたずねられたときの模様をつぎのように伝えている。

「わたしはまずわたしの英語の祈禱書の＜使徒信経＞を唱えた。……だが、＜我はその独り子・我らの主イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりて胎り、処女マリヤより生れ＞というところまでくると、森山〔通訳〕は突然にわたしのことばをさえぎって、＜もう沢山、もう沢山＞と小声でいった。そしてかれは、奉行にわたしの答えを通訳しだした」

「つぎの日に、わたしはわたしの箱から本をもつてきてくれるようにたのんだ。はじめ、その要求は拒絶された。そこでわたしはお祈りのかつこうをして、わたしの知っているかれらのことばで＜カミニ＞礼拝するといい、同時に＜ゴッド＞といった。するとかれらは、聖書をもつてきてくれた。わたしは聖書をかたわらにおいて、これはわたしの礼拝の本だとかれらにいつてやった。

かれらは、わたしのたのみに応じて、聖書をおく棚（トコワリ）をつくつてくれた。かれらは、その本をうやまつているかのようで、それを丁重にとりあつかい、頭の上にもちあげた」

そしてかれ自身は、はっきりと自分はキリスト教徒である旨を公言したと

いっている。もちろん、日本側の記録では神も仏もないと答えたことになっているが、これは通訳が完全にかれの答えを伝えなかったためらしい。このことからすると、幕府の役人は、カトリック(キリシタン)には厳格であったけれど、プロテスタントにはよほど寛大であったらしい。かれは、一寺院に収容されて、翌年にアメリカ軍艦プレブル号で送還されるまで、文中にある森山栄之助や堀達之助ら14名の青年に英語を教えるのである。このうち、森山と堀は、ペリー来朝の際に浦賀で通訳として活躍する。

また、マクドナルド自身は、白人とインディアンの混血児で、混血児なのがゆえの失恋からインディアンの先祖の地と信じた日本に渡る目的で船員となり、しかも日本では日本語を学んで、イギリスないしアメリカが日本との通商を求めてきた際に通訳官の職をえることを念願していた。もちろん、かれのねがいは、鎖国政策によって居住許可がえられないためになえられなかった。しかし、かれは、ごく短期間ではあるが、日本滞在中はかなり優遇され、聖書や祈禱書の所持を許され、また日本の青年に英語を教えたりした。

このようにみてくると、当時の幕府は、依然としてキリスト教の国内布教には反対であったが、カトリックにくらべてプロテスタントの外人にはかなり寛大であり、またそのキリスト教にたいする態度は、キリスト教の教理そのものにたいする反対ではなくて、外国にたいする一般的な恐怖感だけに由来していたように思われる。

## (2)

ところで、19世紀の中ごろに、わが国にたいしてもっとも熱心に開国を要求したのは、太平洋をへだてての隣国アメリカであった。1846年(弘化

3) には、アメリカの対日公式使節の最初というべきビッドル提督が浦賀に来航した。ついで1853年（嘉永6）にペリー提督がサスケハンナ号以下4隻の軍艦をひきいて浦賀にやってくる。もちろん、わが国は断固として開国を拒否せんとした。しかし、ペリーは、さきのビッドルのようにかんたんに引きさがろうとはしなかった。これは、当時のアメリカが米棉の大需要地として中国市場を重視し、また太平洋捕鯨に積極的で、1849年（嘉永2）の投資額は1,900万ドルの多きに達し、従業人員も約1万名であったということ、さらにカリフォルニアを獲得して以来、西海岸から直接アジアと取引したという考えが一般化してきたなどということから考えて、至極当然といえよう。

ペリー艦隊の旗艦サスケハンナ号は、たった二千五百トン、六インチ砲六門を装備した外輪式の蒸汽船であった。とはいえ、当時としては世界的水準の優秀艦であるこのような軍艦が四隻も幕府の所在地である江戸とは目と鼻のところに現われたのだから、幕府の要人たちは肝を冷やした。そしてすったもんだのすえ、とうとうペリーを上陸させて大統領の国書を受けとるのである。しかも日曜日だといえ、かれらは交渉を一切拒否してキリスト教の礼拜をやる。このような事情は、幕府の対キリスト教政策に変化をもたらさずにはいなかったようである。

事実、幕府はペリーが来航した1853年（嘉永6）の末に踏絵の実施を緩和し、さらに1856年（安政3）春には踏絵を緩和する旨を公式に布告した。また、その翌年秋には、長崎の出島においてオランダ人がキリスト教の礼拜を行うことを許可した。

ついで1858年（安政5）7月29日には、アメリカ総領事ハリスと幕府とのあいだに日米修好通商条約が締結されて、その第八条に「日本にある亜墨利加人、自ら其国の宗法を念し、礼拜堂を居留場の内に置も障りなく、

並に其建物を破壊し、亜墨利加人宗法を自ら念するを妨る事なし。……雙方の人民、互に宗旨に付ての争論あるへからず。云々」の規定がもうけられた。

このように、当時の幕府は、外的圧力と内的矛盾とのジレンマに見舞われて、キリスト教禁制の態度を緩和せざるをえなかったわけである。もちろん、これは幕府のキリスト教にたいする態度の根本的な変化を意味するのでもなければ、外人にたいして国内においてキリスト教の伝道に従事することを許したのでもない。しかし、ペリー艦隊の来日以来日本伝道の機会をうかがっていたアメリカのプロテスタント教会は、修好通商条約によって外人の日本居住許可ならびに居留地における信仰の自由を確保するや、ぞくぞくと日本にやってくる。すなわち、1859年（安政6）には三つのミッションが競って宣教師を派遣した。まず、5月には米国聖公会のリギンスが、ついで6月には同派のC・M・ウィリアムスが長崎に、10月には米国長老教会のヘボン（ヘップバーン）が、11月には米国オランダ改革派教会のフルベッキが長崎に、また同派のブラウンとシモンズが神奈川にやってきた。

だが、ここでつけ加えておきたいことは、ペリーの来航とこれら宣教師の来日との関係である。事実、ペリー艦隊には、ジョーンズのごとき艦隊付牧師のほか、日本伝道に非常な関心をもっていたS・W・ウィリアムスという長老教会の宣教師が、同艦隊の通訳として、乗艦していた。このかれは、さきにのべたギュッツラフとともに、1837年（天保8）にモリソン号で中国から日本渡航をくわだてて失敗したことがある。かれは、アメリカン・ボードの宣教師で、1832年（天保4）以来中国にあって伝道に従事していたが、のち中国語の知識を買われてペリー艦隊の通訳に任命され、同艦隊とともに再度日本に来航して、合衆国海軍省編の『ペルリ提督遠征

記』の記録を書いたりしている。その間に、かれは国外脱出をこころみた吉田松陰と話し合ったりもしている。さらにかれは、1858年（安政5）にもう一度アメリカ政府官憲の通訳として長崎にきたり、その際にちょうど同地に病氣静養のためにきていた上海水兵館の牧師サイル（聖公会）と合衆国軍艦ポーハタン号牧師ウッド（オランダ改革派）とともに日本伝道の促進について語り合った。そしてこの三人が、それぞれアメリカの長老教会、聖公会、オランダ改革派教会に手紙を書いて、日本へ宣教師を派遣するように要請した。直接的には、この要請が各教会の外国伝道局を動かして、いよいよその翌年、すなわち、1859年（安政6）、にはじめて正式に宣教師が日本へやってくるはこびとなるわけである。

ちなみに、ウッドは、長崎滞在中に奉行の委嘱をうけて6名の青年に英語を教えていた。またサイルは、長崎奉行の希望によって同地に英語教師として転任することをくわだてたが、教会側（聖公会）の許可がなくてそれは実現しなかった。しかし、明治になってから再度来日して横浜のイギリス領事館付副牧師となり、また外人教会の牧師をつとめ、さらに1874年（明治7）から1879年（明治12）にかけては、開成学校およびその後身の東京大学文学部で哲学と歴史を教えている。このように、聖職者が宣教師としてではなくても、すくなくともキリスト教禁制のわが国にやってきて、英語の教授その他をとおして日本人とある程度接触していたことは、注目に値しよう。

さらにペリー艦隊の来航と日本のプロテスタント史とのあいだには、もう一つの忘れえないことがらがある。それは、1860年（万延元）に来日するゴープルというバプテスト教会の宣教師が、かつてペリー艦隊の乗組員であったということである。かれは、同艦隊とともに来日したのを機縁に日本伝道に献身する決意を固めるのである。その間にかれは、同艦隊にの



っていた仙太郎という漂流漁夫の世話をして日本語を勉強し、帰国してから神学校にはいって伝道者としての教育を受けた。そして仙太郎をともな  
って再び来日したかれは、横浜でヘボンやブラウンと協力して福音宣布に  
つとめ、聖書や賛美歌を邦訳したり、街頭伝道を行うなどして、きわめて  
多彩な活躍をする。参考までにいうと、ゴープルは1871年（明治4）に横  
浜でかれの訳した平仮名ばかりの『摩太福音書』を木版で出版しており、  
また「よいちございます、たいそうゑんぽう、せいじんゑいよになつ、た  
のもし」というような賛美歌をつくったりしている。

### （3）

さきにS・W・ウィリアムスらがハリスによる日米修好通商条約の締結  
にともなうて、それぞれ母国アメリカの各教会に宣教師の派遣を要請した  
ことにふれたが、この要請にたいしてまっさきに反応を示したのは、米国の  
聖公会であった。これが、リギンスやC・M・ウィリアムスの派遣とな  
って具体化したことはいうまでもない。だが、上海在住の宣教師サイルの  
米国聖公会にたいする要請のほかに、中国主教ブーンがやはり対日伝道の  
必要性を痛感して、『スピリット・オブ・ミッション』誌に日本への宣教  
師派遣を訴えた米国海軍の一士官の書簡を送り、日本伝道の開始を要請し  
ている。そしてこれらの要請が伝道局当事者を動かし、またニューヨーク  
の聖マルコ教会をはじめとして各教会の篤信者からぞくぞくと日本伝道の  
ための献金が寄せられた。そこで外国伝道委員会は、当時中国伝道に従事  
しつつあったリギンスとC・M・ウィリアムスに白羽の矢を立てて、1859  
年（安政6）2月に、正式に両名を日本へ派遣することに決定した。かく  
て同年5月2日に米船メリーランド号で長崎に到着したリギンスは、はか

らずも日本本土に上陸した宣教を目的とする最初のプロテスタント宣教師たるの光栄を史上にとどめるわけである。

さて、リギンスが長崎にきた当時は、まだ日米修好通商条約が締結されたばかりで、一般外人の日本居住は正式に許されていなかった。そこでかれは、米国領事のあっせんでやっと上陸を許可され、さきのサイルと長崎奉行の約束を受けついで、役人に英語を教授することになった。だが、永年の中国伝道で病をえて健康がすぐれなかったために、在日わずか9カ月で帰国の途についた。もちろん、当時は日本人伝道は依然として厳禁であったために、かれは伝道の面ではなんら直接的な成果をあげてはいない。しかし、かれは、日本人の宗教上の偏見をなくするために千部あまりの西歐の歴史や地理や科学に関する中国語の訳書を輸入して、各方面に販売ないし配布して、他日あらんことを期していた。また、英語を教えるかたわら、『英和千字文』という一種の英和対照語集をつくって、1860年(万延元)に上海で出版している。これは、かれの日本伝道の置土産ともいうべきもので、のちにC・M・ウィリアムスやヘボンやフルベッキにたのまれて1867年(慶応3)にニューヨークで再版して長崎や横浜に送られ、ついで1873年(明治6)には大阪で第三版がつくられるほど好評を博した。さらに、当時アメリカではキリスト教禁制の日本に宣教師を送るのは無益とする意見があったのにたいして、1861年(文久元)に『スピリット・オブ・ミッション』誌上に反ばく文を寄せ、宣教師派遣の必要性を強調するなど、その後における日本伝道のために種々有益な働きをなした。

C・M・ウィリアムスは、リギンスより2カ月おくれて中国から長崎にやってきた。そして、リギンスとともに長崎にあって日本伝道の基盤を固めるのであるが、当時のわが国は開国をめぐって尊王攘夷派と佐幕開国派との対立・抗争が激化して政情はきわめて不安定であった。いわゆる安政

の獄が起って、橋本左内や頼三樹三郎や吉田松陰などが投獄されたのもそのころである。また、辻々には依然としてキリシタン禁制の高札が立てられてあり、外人の生命・財産の安全などはまったくはかり知れなかった。事実、1860年（万延元）の暮にはハリスの通訳をしていたオランダ人のヒュースケンが江戸の芝赤羽橋で殺害されているし、その翌年には水戸の浪士が高輪東禅寺のイギリス公使館を襲撃したりしている。

また、日本人一般は、永年の鎖国のためにキリスト教のなんたるかをよく知らず、宣教師をあたかも魔法使いであるかのように考えているものが多いといったような状態であった。もちろん、長崎は徳川時代の唯一にして最大の外国貿易港で、開国後も横浜・箱館とならんで開港場となり、在留外人も相兰にあって同地の人びとは相当に海外事情を知っていたはずなのだが、それでもなおウィリアムスは、同地について早々に、魔法使いとまちがえられるような経験をしている。たとえば、つぎのような話がのこっている。

「或る夜、一人の来客あり、珍らしき事とて監督〔ウィリアムス〕は之を迎へ来意を問ひしに……数本の真鍮の煙管を取り出し、誠に申兼ますが、どうぞ之を本金にして下さいと云ふ。監督は大に驚かれ、私は手品師とは違ひますと断られた……彼はなかなか承知せず、是非教へて下さい、極く内密に致します、誰にも決して話しませんから、キリスタン、バテレンの秘法を教へて下さい、と切りに願つた」

ウィリアムスらがこのようなナンセンスにたびたびあったであろうことは想像にかたくない。かれらが、こういった状態の、しかも言葉がまったくわからない異国へ、ただ神のみ心あるを信じ、福音宣布の召命を感じてのりこんできた信仰と勇氣には、感嘆のほかはない。

ウィリアムスは、リギンスが帰国後も単身長崎にとどまり、1862年（文久2）に長崎在住の外人のための教会を設立した。これは、おそらく日本

最初のプロテスタント教会であろう。その間、リギンスのあとをうけて1890（万延元）にシュミットがやってきた。医者であるかれは、主として医療事業に従事した。だが、シュミットもほどなくして病気のために帰国したので、ウィリアムスはふたたび一人になった。しかも、本国ではそのころ南北戦争（1861—65年）が起って母教会の援助はあまり期待できなかった。だがかれは、長崎内地にあって黙々として伝道に従事した。そしてついに、1866年（慶応2）に、肥後の庄村助右衛門に洗礼をさずける。これは、日本聖公会にとっての最初の受洗者である。この初穂をえたかれは、同年秋に帰国したが、その際に東洋伝道の開拓者ブーン主教のあとをついで、中国および日本の兼任主教となって再び日本にもどった。その後1874年（明治7）には日本専任主教となり、大阪・東京などで活躍して、各地に教会を創立、また三一神学校や立教学院の設立にも貢献した。1887年（明治20）に聖公会系の三つのミッション、すなわち、米国聖公会とイギリス系のC・M・SとS・P・G、が協力して日本聖公会を組織するや、かれはその総会議長にえられ、のち1889年（明治22）に日本主教の地位をマッキムにゆずって一旦帰国したが、また来日して、こんどは京都・大阪を中心に活躍し、1908年（明治41）に帰米するまで伝道に従事した。

#### （4）

リギンスやウィリアムスが長崎を中心に宣教活動を開始したのにたいし、ヘボン、ブラウン、シモンズらは主として長崎・箱館とともに開港場となった横浜で活躍しはじめた。当時、幕府は開港の影響を最小限にいとめようとして種々の策を講じたが、わが国の貿易は年々増大していく一方であった。なかでも横浜の貿易の発展はめざましくて、だんぜん他港をおさ

え、貿易全額の三分の二以上を占めた。とともに、この横浜は文化の点においても、鎖国時代の長崎にとってかわって、一躍新しい文化の中心地となるにいたる。それは、ヘボンやブラウンたちが同地にあつて、キリスト教禁制のあいだは主力を教育や医療にそそぎ、新しい文化の導入の上に大きな役割をはたしたからである。

ヘボンは、プリンストン大学とペンシルベニア大学医学部の出身で、在学中に宣教師になる決心をして、卒業後米国長老教会の医療伝道師として1840年（天保11）に中国へとむかったが、あいにくのアヘン戦争のために2カ年間シンガポールで医療に従事し、ついでアモイで2カ年間医療に従事したが、夫人の病気や愛児の死のために一たん帰国し、10カ年あまりのあいだニューヨークで病院を経営していた。だが、日本が開国したことを聞くと、こんどは日本伝道の宣教師たることを志願して、日本にやってくるのである。上陸してからのかれは、はじめ3カ年間横浜の浄土宗の成仏寺を宿所として医療伝道を開始し、夫人も英学塾を開いて日本人子弟に英語を教えた。そのかたわら、聖書の邦訳をやり、1872年（明治5）には奥野昌綱と共訳の『馬可伝福音書』と『約翰伝福音書』を刊行、その後も邦訳聖書の作成・刊行に尽力した。また、1867年（慶応3）には『和英語林集成』を完成し、その後も日本語のローマ字化に苦心して、いわゆるヘボン式ローマ字を創始した。医療の面では、三代目沢村田之助の足を切断治療したというようなエピソードもある。それに明治学院や共立女学校などの創立者としても有名である。

ブラウンは、エール大学を卒業後、コロンビア神学校とユニオン神学校に学び、1839年（天保10）から数年間中国伝道に従事したのち、一たん帰国して、あらためて米国人オランダ改革派の宣教師として日本に派遣されてきた。そして、途中一回帰国したが、1879年（明治12）に日本を去るま

での約20年間に、ヘボンと協力して英語を教えたり、邦訳聖書の刊行に協力したりした。その最初の門下生には大島圭介・小野梓・奥野昌綱などがいたし、のちには植村正久・押川方義・山本秀煌のような伝道者が出ている。

シモンズはブラウンとともに来日した米国オランダ改革派の宣教師である。かれもヘボンと同じように医療伝道を志した医者で、来日後まもなくして伝道局との関係を断つて開業医となり、一時ヨーロッパにいてベルリンで研究してから再び来日し、大学東校の教師や横浜十全病院長などを歴任した。その間、1877年（明治10）のコレラ流行に際しては治療のために大活躍したり、虫下し薬の「セメンエン」を調製してセメン先生といわれたりした。のち、福沢諭吉と知り合い、慶応義塾で教鞭をとる。

さらに横浜には、ヘボンとブラウンとシモンズについて、1860年（万延元）にはバプテスト教会のゴープル、その翌年にはオランダ改革派のバラ、また1863年（文久3）には長老派のトムソンがやってくる。そして、かれらはいずれも横浜を中心に、お互いに協力し合いながら活動をおこなったのである。はじめのころは、ヘボンとブラウンとゴープルの三家族は、ともに成仏寺に住んでいた。だから、長崎で活躍したのは、リギンスやウィリアムやシュミットといった聖公会系の人びと以外には、オランダ改革派のフルベッキだけである。

もちろん、フルベッキが長崎にいったということには、いささか理由がありそうである。というわけは、アメリカの宣教師として来日したとはいえ、もともとはオランダ人であるかれにとっては、まず最初に鎖国時代にオランダ貿易を行っていた長崎という地に住む方が日本語を学ぶ上で便利であったように思われるからである。かれは、母国のオランダで一応の教育をおえたのちに、アメリカへ移住してオーバン神学校に学び、宣教師と

して長崎へ赴任した。同地では、はじめ日本語を習得するかたわら、しばらくは聖公会の外人教会でオルガニストをつとめ、やがて幕府の済美館と佐賀藩の致遠館の英語教師になった。当時この両校には、岩倉具視・江藤新平・大隈重信・伊藤博文・井上馨・小松帯刀・西郷吉之助などの明治維新の元勳たちが学んでいた。大隈は、のちに当時のことを回顧して、「先生はある宣教師の如く強いて之を説かんとする人にあらず、余の基督教の知識を得たるは、三年間先生に就いて学ぶ所ありしによる。一時は信者たらんかと思う程なりしも遂に決心するに到らず」といっている。フルベッキは、英語だけではなく、合衆国憲法や西歐諸国の法律一般なども教えたといわれ、薩長両藩の連中がしきりにかれの意見を聞きにきたとのことである。だが、伝道の面でも相当な成果をあげたらしい。1866年（慶応2）には佐賀藩の家老村田若狭とその弟綾部恭がひそかに洗礼を受けたし、また1868年（明治元）には熊本の仏僧清水宮内が受洗する。やがて明治維新後には、新政府に招かれて上京し、大学南校で教鞭をとり、教頭をつとめたりした。また、政府にいろいろと意見を具伸したことでも有名で、岩倉特使の歐米派遣や陸海軍の創設はかれに負うところが大きい。こういった活躍は、かれの温厚な人からおよびすぐれた日本語の知識と相まって、従来の政治当事者の宣教師にたいする認識を改めさせるに役立った。1877年（明治10）に官を辞したのちは、伝道に没頭して、各地を巡回したり、一致神学校や明治学院で神学を教えたりした。また、聖書の翻訳委員として松山高吉と詩篇を邦訳したりしている。そして永年日本にとどまったためにアメリカの市民権ならびにオランダの国籍をとともに喪失してしまったため、1891年（明治24）には日本政府の特別なとりはからいで日本人同様に遇せられる。また、その死に際しては、明治天皇から遺族に告別式の費用が給せられ、東京市からは墓地が提供された。

このように、初期の宣教師たちが、いずれおとらぬすぐれた人格のもちもので、のちのちまでも日本人にしたわれ、また開国当初にあつて西歐のすぐれた文化を伝えて、わが国文化の発展に大きな貢献をもたらしたということは、注目に値する。しかし、その反面で、かれらがキリスト教禁制の枠内にあつて、公然と伝道に従事しえないためにいきおい医療や教育に主力をそそがざるをえなかったということは、それ以後のわが国におけるプロテスタント史の性格を大きく左右しているように思われる。

### (5)

とにかく、これらの宣教師が来日した当時の生活は、きわめて不穩であつたらしい。かれらは、たとえ上陸を許されたとしても、その身边にはたえず密偵がつきまといつていた。ヘボンも、来日当初の生活を回顧して、つぎのようにいつている。

「私は三年間成仏寺に生活したがそれは頗る妙なものであつた。寺門の外には両刀を腰にしたる武士が四人づつ断えず立番をして居る。内には英語を解する人は居らず、又日本語の解る米国人もなく随分不自由であつた。何にしる此の三年間に十五人の外国人が彼処此処で殺害されたのであるから、油断のならぬ時代であつた。或時定次部という日本人の家僕を雇ひ入れたが、二週間程経て急に暇を呉れと申出た。何うしたのだと聞くと、彼の云ふに、自分は何藩とかの武士であるが、夷人の内情を探り隙もあらば斬り捨てようと思つて家僕に入り込んだが、貴方は夷人とは思はれぬほど親切で、仁義道徳を弁へて居られるから殺すに忍びぬ、自分の考へに誤謬のあることを覺つたから御免を蒙つて帰りますとのことであつた。其の後家僕を雇ひ入れると屢々政府の探偵であつたことが解つた」

また、かれらは、さきのウィリアムス主教のように、クリシタン・バテレンの魔法使いとまちがえられるような経験をすることがしばしばであつた。それに、伝道を目的としつつも、公然たる伝道はできない。にもかかわら



ず、かれらは来日4年目にして、はやくも一人の日本人受洗者を出している。すなわち、1864年（元治元）の11月に、ブラウンやバラの日本語の先生であった横浜の鍼医の矢野元隆が、ヘボンの立合いのもとに、病床でバラから洗礼を受けている。この矢野は、まさしく日本プロテスタント史上最初の受洗者であった。その後数年をいですして、ウィリアムスやフルベッキなどから数名のものが洗礼を受けている。

だが、キリスト教の布教が禁止されている当時にあつては、宣教師たちの努力は、ひそかに信者をつくり出すことよりも、むしろ西歐の学問・文化の知識を利用して、ひろく日本人一般に感化をおよぼすということに重点がおかれていたといえよう。さきにすこしくふれた1861年（文久元）の『スピリット・オブ・ミッション』誌上のリギンスの一文は、当時の在日宣教師の態度をもっとも単的に現わしているようである。リギンスは、そのなかで、つぎのようにいっている。

「一、日本の図書や教師によつて日本語を学習する。二、語学の研究をして聖書の和訳をするよう工夫する。三、英語を学ぼうとする日本人に英語を教えて彼我の交渉を密にする。四、中国にいる宣教師たちの著わした漢訳の歴史、地理、科学の書を販売して、宗教上の偏見を減ずる」

このように、かれらは日本語の修得、英語の教授、聖書の邦訳などにとめて、ひたすらに時期の到来をまった。それは、きわめて地味な努力であった。だが、英語の教授は、数多くのミッション・スクールの創立・経営の途に通じる。フルベッキのように官職についたものは、わが国の法律その他の面で、間接的に当時の社会全体にさまざまな影響を与えた。医療伝道は、わが国の近代医学の発達のために大いなる貢献をなした。語学研究や聖書の翻訳などは、わが国の外国語研究熱をたかめるとともに、外国文学を導入するきっかけをつくった。

しかし、それにもまして、本質的に反封建的な性格をもつプロテスタン

ト信仰が、まさに封建制が崩壊せんとしていた幕末期の日本にはいつてきた意義は大きい。ウィリアムス主教は、いみじくも近代社会の胎動を観察して、1864年（元治元）につぎのように母国に通信している。

「此専制国に於ても、矢張幾分か輿論の行はるるありて、其声は全然無視する訳には相成不申、而して輿論の力は不絶増進致居候、且つ夫れ商人階級も其声の増進して、外国人と接触し、他の国に於て商人の占むる位地を学ぶにつれて、彼等は慙々自己の権利を自覚し、進んで之れを主張いたし候、されば、我等の時は必ず将に來るべく、其來るは現今人の考ふるよりも意外に早かるべく候、されば将来第三階級の発達して、其意見が此国民の會議に於て、適當の威重を有する時の至らんことは、期して待つべきに御座候」

もちろん、わが国においては、ウィリアムスが予期したほどには第三階級なるものが成長せず、明治維新以後においても封建的諸関係が残存した。このことは、近代市民社会をその主な活動舞台とするプロテスタントのその後における伝道をきわめて困難ならしめる。だが、革新的な分子は、開国とともに、はやくからプロテスタントの宣教師に接近していたようである。このことは、当時海外渡航は禁止されていたにもかかわらず、多数の青年が宣教師の世話でひそかに海外へ留学したことでもわかる。たとえば、開明的な思想家として有名な熊本藩の横井小楠は、兄の遺児の横井大平と佐平太をフルベッキのもとに送ったが、この両名はフルベッキの世話で1866年（慶応2）にアメリカのラトガース大学に留学している。そのほかにも同大学には当時フルベッキの紹介で十数名のものが留学していたとのことであるし、新島襄などを計算にいれれば、幕末期に国禁を犯して海外に留学したものは、優に数十名をかぞえるであろう。そして、それらの連中はなんらかの形でキリスト教的な教養を身につけて帰国したはずである。したがって、信者の数からすれば、幕末期におけるキリスト教の感化は微々たるものとはいえるが、文化的・社会的な影響の大きさを考えると、初

期宣教師たちの活躍は非常にみのりの多いものであったというべきであろう。

だが、不幸にして明治維新が西歐的な意味における近代市民革命でなかったということは、その後におけるプロテスタント教会の飛躍的な発展を約束しはしなかった。だから、1873年（明治6）にキリシタン禁制の高札が撤去されて公然と布教することを許されてからも、数字的には信徒の数はふえたとはいえ、わが国のプロテスタント教会は容易に国民的基盤に根ざす自主的な教会を確立しえないで苦悩するわけである。

#### 主 な 参 考 文 献

Otis Cary, *A History of Christianity in Japan*, 2 vols., New York and London, 1909.

Townsend Harris, *The Complete Journal of Townsend Harris*, edited by Mario Cosenza, New York, 1930.

Ranald MacDonald, *Ranald MacDonald*, edited by W. S. Lewis and N. Murakami, Spokane, 1923.

Henry St. George Tucker, *The History of the Episcopal Church in Japan*, New York, 1938.

片小沢千代松「日本新教百年の歩み」1957年

久山康雄編「近代日本とキリスト教」（明治篇）1956年

重久篤太郎「日本近世英学史」1941年

隅谷三喜男「近代日本の形成とキリスト教」1950年

高谷道男「ドクトル・ヘボン」1954年

比屋根安定「日本近世基督教人物史」1935年

元田作之進「老監督ウィリアムス」1914年

山本秀煌「日本基督教会史」1929年